

21 酪農をとるか、市長をとるか

私の滞在中、ヴァドソーの隣町セル＝ヴァランゲル市で議会が開かれていました。19世紀後半にヴァドソー市から分かれた自治体で、市の中心街は空港や港のあるキルケネス。市長も、事務方トップの事務総長も女性。女性議員は、ヴァドソー市より多くて、25議席のうち13議席です。430市のうち、女性議員が40%を超えたのは3分の1以上ですが、過半数を超えたのは、セル＝ヴァランゲル市を含めてわずか6%です。

オーロラ観光のおすそわけ

ヴァドソーからは豪華客船フッティルーテン号でキルケネス港に渡りました。ベルゲンからの日本人観光客が大勢乗っていて、オーロラを見た感激で、船内はハイパーテンションの会話に満ちていました。

6泊7日の船旅だそうで、私の降りるキルケネス港が終着港。皆さんはおそらく飛行機でオスロ空港に飛ぶのですが、オーロラ観光のおすそわけに預かった私は、数時間の船旅。港から路線バスで市街に出て、セル＝ヴァランゲル市役所へ。市役所正面には「手押しのでき」がズラリ。凍った道での転倒防止にもなるし、買い物袋や子どもを乗せられるし、刃に足を乗せて片足で地面を蹴れば自転車並みのスピードも出ます。冬のノルウェーには欠かせない優れものです（写真）。



市議会の議場は、テーブルが円形に並んでいる場合もありますが、ここは、日本によくある形で、行政幹部席が奥にあり、これに対面するように議員席が並んでいます。

議題は「倒産・廃業中のストヴァランゲール鉄鋼会社の再開について」。パワーポイントで図表や写真を駆使して行政官が説明。世界の鉄鋼需要にはじまって、この市への経済波及効果から環境問題に至るまでの詳しい解説がありました。

傍聴席は満員。2階の記者席でカメラのシャッターを押していたら、隣の女性記者から「議場のどこから撮影してもいいんですよ。議員のそばで撮影したら？」と言われたので、議員に近づいてシャッターを押しました（写真）。



▲セル＝ヴァランゲル市議会は、女性議員 13 人に男性議員 12 人

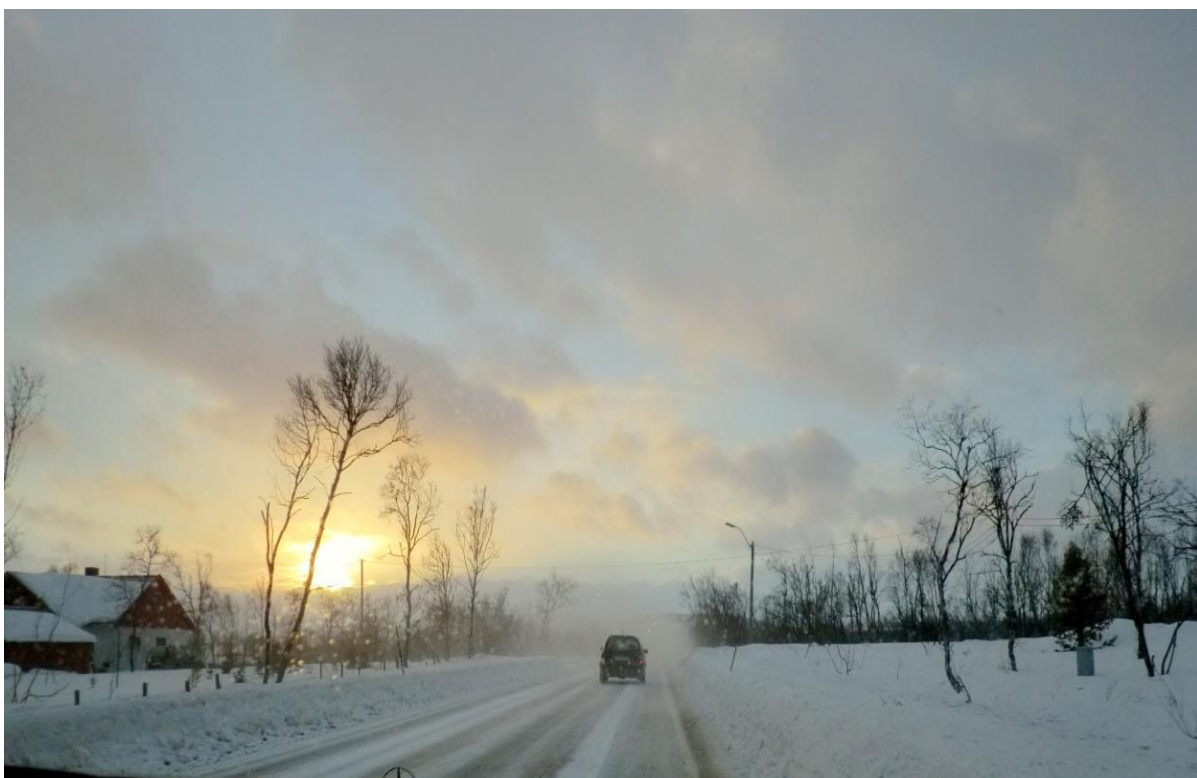
酪農の売上は年1500万円

議会終了後、女性議員のセシリア・ハンセンが取材に応じてくれることになりました。長年の友人で政治家のオーレ・グスタフ・ナールッドが「元気なサーミ女性がいるよ」と前もって教えてくれました。農民の声を代弁する「中央

党」に所属する酪農家です。

彼女の車で自宅へ向かう途中、今しがたの議題について聞いてみました。

「鉄鋼会社が再開されれば雇用が増えること、市の経済が潤うことは間違いありません。でも、環境汚染対策や、雇用者の住宅問題、子どもの保育や教育問題など、あらゆる分野から判断します。私は環境問題を重視する中央党ですから、汚染は許しません」



▲セシリアの車の中から見たセル＝ヴァランゲル市のはずれ

一帯がすべて雪に埋もれたパスヴィックという農村に着きました。

「農業という仕事を選んだ私は幸福です。食物は生きる基本だから外国に依存するなんてダメ。でも農業の発展は政治ぬきにはありえません。だから農業経営者が議員となって政策に影響力を持たなくてはね。それに、政治も農業も、男性だけに任せては、ろくなことになりませんから、女性が議員になるのは、最も大事なことよ」

40歳。365日ほとんど休みなし。女手ひとつで、乳牛17頭、雄牛10

頭のほか鶏、豚も飼育し、年間100万クロネ（約1500万円）の売上げ。

中学生の娘を育てるシングルマザーです。酪農家の両親に雇われる形で10年以上働いて、昨年、農地、畜舎、機械など一切を親から買い取って農業主となりました。

市議会議員は4期目で、今年9月に改選期を迎えますが、次期議員候補者リストへの登載を断ったため、中央党は代りの人材探しに苦労しています。候補者リスト提出期限は、選挙のある年（国政も地方も4年ごとなので、選挙は2年に1回やってくる）の3月31日12時と法律で決められています。締め切り間近だというのに、私が滞在した2月末から3月上旬にかけては、まだ決着がついていません。

「セシリアにもう一度出てもらいたい。セシリアしかいない」という多くの声に、いったん断った彼女の心は揺れていました。

酪農をとるか市長をとるか

ノルウェーの市長（オールフォーレル ordfører）は、選挙で最大与党となった政党の議員から選ばれることが一般的です。日本の国会と同じ議院内閣制です。

セル＝ヴァランゲル市議会は伝統的に労働党が強く、現市長も労働党出身の女性です。ところが連立相手の左派社会党が、労働党を敬遠して中央党に歩みよった。9月以降の市議会で、中央党が左派社会党と連立を組めば中央党から市長が選出される可能性は高い。となると、市長はセシリアが第一候補です。

「議員ならノルマ（会議）がひと月に1、2回ですが、市長はフルタイムの仕事でしょう。酪農を続けるには、誰かを雇わなくてはならない。でも、すべてを任せられる人なんかいるはずがないんです」

決断の時はせまっています。「あなたを見たとき、中央党のトップが送りこんできた使者かと思ったわ。日本からの記者だとか言って私を説得するために…」と真顔で言うので、私は大笑い。

酪農の仕事はブダイエ（牛飼い）と呼ばれて、かつては女性の職業だったのに、機械化が進むにつれて男性の仕事に変わりました。夫婦や家族で酪農を営む家はあるものの、セシリアのように女手ひとつで切り盛りするケースはノルウェーでもまだ珍しいのです。

朝6時。糞尿の処理と清掃。牛に飼料をあたえ、ミルクを絞ります。乳牛の4つの乳頭にミルカー（搾乳機）を接続する前、セシリアは、牛の名前を呼び

ながら、乳頭を丁寧に拭きます。何回も見回り、なでたり、軽くたたいたり、声をかけたり、と愛情いっぱいです（写真）。



▲セシリアの朝は息つく暇もない

「酪農は朝が最も大切です。市議会は午後が多いから、やってこれたのです。まれに朝の会議があるのですが、その時は、『代理議員』に出席してもらいます」

代理議員は、「職務免除」を願い出た議員の代理役で、選挙で次点だった候補者がスタンバイしています。議員と同じ権限を持っています。

ノルウェーでは大臣と国会議員の兼職が禁じられているので、政権与党の次点候補は代理国会議員になる可能性が高くなります。たとえば、2011年3月20日、中央党のオーラ・ボーテン議員が石油大臣に就任しました。日本なら補欠選挙となりますが、こちらでは、ただちに彼の選出区である県中央党候補者リスト次点候補のスールトルンデラグが国会議員になりました。

生協スーパーのレジ係の女性が、スーパーの赤い制服から渋いスーツに着替えて国会に向かう、そんな様子が大きく報道されました。

国会・地方議会に限らず、病欠、育児休業、教育休暇をとったりする議員が

多いため、代理議員の出番は非常に多いのです。

18歳で市議会議員になった、あのNRKの職員シリア・アルヴォラも、任期4年目には、オスロ大学に通学することを決めて、代理議員に議席を譲りました。

酪農家のシングルマザーが議員を全うできるのも、こんな代理議員制度があるからなのです。この政治の軽やかさや柔軟さに、私は強くひかれます。

誰もが気軽に候補者に

セシリアは、牛舎とミルクタンクの部屋を行ったり来たり。途中、携帯電話が何度か鳴ります。議会の仕事だ、と私に目配せします。

「6、7月の2か月は、朝、ここで搾乳したら、牛を野に放すの。でも、冬はこのとおり重労働よ。乾燥フードを小型シャベルで1頭に12回。それを27頭に毎日やるの。同じ動作の繰り返しだから、手首を痛めたり、指にマヒができたり。医者通いもしょっちゅうです。干し草を与える作業はもっと大変で、冬季は凍っていて、すっごく固くて、重いので……私の手、触ってみて」

手のひらに固いマメが並んでいました。

夜、セシリアは私のためにサウナに薪をくべ、2人でサウナに入りました。ほてった体でテラスに出た彼女は、雪の大農場に向かって大声で語り掛けました。「あ～、この大地！ この大きなサイロと牛舎！」

サウナに入っては出て、テラスでビールをグイッとやる。零下12度の空気が、ほてった裸の体を急速冷凍します。フィンマルクに来て初めて、私は冷たい空気の心地よさを体感しました。となりでセシリアは「零下12度なんて、まるで夏みたい」と笑います。

「全て自分の力で手に入れたんだ、がんばって守ろう、って思う。私は、目の前の土地と建物、かわいい牛を見るとき、『生きてる』って実感がわくの」「何歳で議員になったの？」

「今70歳になる父親が中央党の党员でした。演説が上手で、議員もした。ある日、父の友人が、わが家を訪ねてきて『キミなら名政治家になれる、中央党の市議会議員候補リストに載せたい』と言ったの。24歳の時でした。すごく名誉なことだと思いました。父親といっしょに、中央党の会議には

小さい頃から参加していたから、政治には自然に関心を持つようになりました。党大会の時はいつも、母親も妹も一緒でしたよ」

ノルウェーの政党の大会は、ホテルに泊りこんで行われることがほとんどで、多くの党員は家族連れで参加します。プログラムにはアトラクションや子ども向けのゲームやスポーツも組み込まれ、家族旅行気分です。この気楽な政治参加の風土、うらやましい限りです。

「結婚した男性は、あなたが政治に参加することをどう思ったの」
「前夫はひどいなまけもので、結婚は大失敗。だから離婚した。娘にはまあまああの父親ですし、娘の父親は彼だけだから、これ以上は言わないけれど……立候補を夫には相談しなかったわ」

「初めて立候補したときのリストの順位は？」
「ずっと下のほう。自分の名前が初めて候補者リストに登載されるだけで、人生のすごいジャンプで、当選なんか考えません。でも、友人たちが私に×印のチェックを入れたため、順番が上がって当選してしまった。それ以来、私はいつも上位。中央党からだけでなく他の政党からも追加票を奪える候補者なんですよ」

たとえば労働党の候補者リスト用紙の裏に他党の候補者の名前を書くと、その分だけ労働党の票が減る仕組みになっているのです。

「人気の秘密は？」
「選挙民はみんな、頭で仕事をする人よりも床で仕事をする人を望むんじゃないかしら。私より教育程度の高い人は多いけど、私みたいな働き者はいないし、私は難しいことを短かく話せますから（笑）」

軍隊も驚くパワフルさ

「過去にも候補者リストの1番目、つまり市長候補だったことがありましたね？」

「3期目の2003年は、中央党リストの第1番目。その時は、私が市長になるんだという覚悟で選挙に臨みました」

「それで市長になった？」

「いいえ、中央党は保守党と連立を組んで、保守党リストの1番目が市長になって、中央党の私は副市長」

「副市長は、市長の代行役？」

「そう。市長代行でトルコに行きました。イスラム社会ですから、30代の女性の私を見てむこうの政治家たちは仰天していました。牛を何十頭も飼育している酪農主だと言ったらもっと驚きました」

こんな過酷な自然の中で、女手一つで農業と議員を両立できる社会って、本当にすごい！ と私は感激。

「私は、特別だとは思っていません。ここらは豪雪で車が動かなくなることがあるんです。先月、ノルウェー軍の兵士がやって来て『雪にはまってしまったので、お宅のトラクターで引っ張ってくれないか』と言うんです。それで私がトラクターのある納屋に行こうとしたら、『あなたがやるんですかッ』とびっくりしていました。トラクターで軍用車を引っ張り上げたら、感謝されました、ハハハ」

彼女の口からは、「サーミ人だから」という言葉が一度も出てきません。少数民族への社会的差別は、今や切実な問題ではなくなった。この国の平等主義は、いい線をいっているな、と思いました。

鉄鋼が衰退して福祉の町に

セシリア宅の玄関に、トロール（ノルウェー民話に出てくるお化けの巨人）のような男性が現れました。地元紙「セル＝ヴァランゲル新聞」の記者ユングヴ・グルンヴィックが、私を取材するために、やってきたのです。

「セル＝ヴァランゲルまで取材に来た日本人がいると聞きました。よりによってこの寒い時期に、なぜ、こんな所に来たのですか」

「最も厳しい寒さの地で、女たちが政財界でも家庭でもハッピーに生活しているなら、この国の民主主義は本物だと思って、それを確かめるために、あえて寒い時に取材に来たんですよ」

ユングヴは、男女の就業率のメモを見せてくれました。

セル＝ヴァランゲル市の女性は、70.2%が働いていて、これはノルウェー全体（67%）や、フィンマルク県（67.7%）より高い。女性たちは、経済力を身につけた結果、発言力を持ったと、ユングはいいます。

「小さな地方の町の女性は、都会の女性より教育を受ける機会が少ない。ひいては役所や企業などへの就業率も低い。でも、ノルウェーでは30年ほど前から変革が始まった。ここでは、スドヴァランゲール鉄鋼の不振の時期が、女性の職場拡大の時期と重なります」

スドヴァランゲール鉄鋼には、国中から、いや近隣の国々から男たちが出稼ぎにやってきた。陰りが出たのは1990年代はじめで、1996年には倒産。その1990年代に、育児休業期間の延長に加え、保育園や学童保育（放課後の保育サービス）などの制度が充実し、この分野の職場に進出したのが女性たちでした。

ノルウェーの労働環境法で保障されている「教育休暇の権利」が、フィンマルクの女性を大いに後押ししました。

同法には、「少なくとも3年間以上の労働経験のある人が、同じ雇用主のもとで2年間働いた被雇用者は、組織化された教育コースに通学するために、最大3年間の完全休暇または部分休暇をとる権利がある」（12項11）とあります。

新たに教育を受けるための費用には教育ローンを活用します。2000年には国をあげて生涯教育が奨励され、翌年には、「25歳以上の大人は、正式卒業資格の有無にかかわらず、大学またはカレッジに入学できる」という法律もできました。

「女性は勉強に熱心です。いったん社会に出た女性たちが、この制度を活用して大学に通い、資格をアップしたんです」とユングヴは教えてくれました。

ノルウェーでは、すべての人が一生を通じて何度でも教育を受けられるようになっていて、それが国全体をパワーアップさせたのは間違いありません。そして、地域は衰退するどころか、栄え始めたのです。

「福祉や教育は社会の活力を生み出す立派な産業」だということを、この極寒の地は証明しています。

労働組合を立ち上げた革命家エリシフ

しかし、労働者のための福祉が天から降ってくるなどありえない。闘った人がいるはずだとユングヴに聞くと、「実は革命家といえる女性がいたんだ」。

その名はエリシフ・ヴェッセル（Ellisif Wessel）。キルケネスの主要産業だったスドヴァランゲール鉄鋼会社に労働組合を立ち上げた女性です（注1）。

インターネットに名を打ち込むと、肩パッドのはいったドレス姿の若い女性

が現れました。1866年生まれ、1949年没の写真家でした。

彼女の撮影した白黒写真をネット画面で見ました。木の枝で作った粗末な小屋の前に立つサーミ家族、ボロをまとった4人の子どもと垢で薄黒く汚れた顔の親、歯のかけたサーミの男性、子どもをかかえて笑うサーミの母親、雪の山をトナカイぞりで荷を運ぶサーミ人、魚の網を修繕するサーミ家族、台所で煮物をしながら繕いものをするサーミ女性、鉱山で働くサーミ労働者たち……。



▲等身大のエリシフと、彼女が使ったカメラ（グレンセランド博物館）（注2）

ノルウェー南部の裕福な家庭に生まれ育ったエリシフは、医師アンドレアス・ヴェッセルと結婚。地域保健医としてキルケネスに赴任し、往診に出歩く夫に同行し、貧しいサーミ人たちの暮らしを目の当たりにしました。

飢え、寒さ、栄養失調、病気に喘ぎ苦しむ人々を支援できないものか。何度も当局に掛け合いましたが、「話が大げさだ」と言われるだけで、取り合ってもらえません。

そこで彼女は募金活動を始めます。募金するときの説得の資料として、サーミ人たちの暮らしぶりをカメラに納めた、その作品は100年以上たった今日でも、世界各地で展覧されています。

スドヴァランゲール鉄鋼業の生産が始まった20世紀初め、彼女は労働組合「北の岩」を結成。ありとあらゆる妨害にあつて、艱難辛苦の結成でした。

組合の初めての集会は、自宅でもある医院の片隅を使い、彼女は組合の書記長と会計を買って出ました。

王制もキリスト教も否定する筋金入りの平等主義者で、生誕から145年経た今も、人々の記憶に生き続けています。毎年5月1日のメーデーの日は、エリシフの墓に、必ず、労働組合から花がたむけられるそうです。

(注1) https://nbl.snl.no/Ellisif_Wessel

(注2) <http://www.varangermuseum.no/besok-oss/besokssteder/grenselandmuseet/>